

学校開放を前提とした整備の例

【事例紹介】 長野県浪合村の浪合学校：山間の小規模自治体での学校を核としたまちづくり

- ・人口770名ほどの山間の小さな村の小規模学校の改築事業。小さな村では学校が最大の公共施設であり、子ども達のみならず村民全員で使える施設を目標とする発想で進められた。学校を村中でとことん活用しようと、会議室、図書室、食堂、特別教室（美術、家庭、技術）、体育館等を村民全体の利用を前提に設計した。組織的には小中学校であるが、村全体の学校という意味で「浪合学校」と名付けられ、ここで培われた考え方がその後のむらづくりや地域活性化に繋がっていった。



【事例紹介】 福島県会津町立西会津中学校：地域の生涯学習拠点と位置づけた統合中学校の整備

- ・4つの中学校を1つに統合する構想のもとで、統合中学校を地域の生涯学習拠点と位置づけ、学校開放を積極的に取込んだ校舎の整備が進んでいる。特別教室、多目的ホール、図書室等を学校開放するとともに、インターネットやCATVによる情報発信拠点の機能も担う。
- ・多目的ホールは、音楽室との一体利用で式典やコンサートにも対応可能。別棟とした図書室では専用出入口や託児コーナーを設け、住民が使いやすいよう配慮した。

